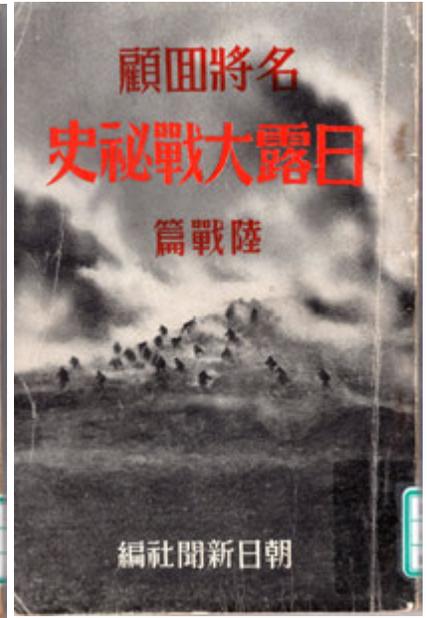


日清日露戦争と奈良①

明治 27 (1894) ~ 28 年の日清戦争、明治 37 (1904) ~ 38 年の日露戦争は、徴兵制による国民皆兵制度が敷かれて初めての本格的対外戦争になりました。日本は両戦争において勝利を収め、大陸に足場を築きます。加えて両戦争は、新聞や初等教育の普及を加速し、ナショナリズムを高揚させました。

その一方で、庶民層からも多数の戦死者、戦病死者が出るという未曾有の事態に、明治政府は彼らを国家で祀るという方法を用いました。その装置が、今でも歴史認識、対外関係など様々な議論になっている靖国神社です。

靖国神社は、もともと戊辰戦争での新政府軍側戦死者を祀る施設から発展し、明治 12 (1869) 年にその名となります。この間、士族反乱での鎮圧側戦死者や横死した尊攘派志士を祭神に加えていったうえに、両戦争における大量の戦死者の合祀が行われました。その結果、靖国神社は「明治維新の神社」というよりは、「対外戦争の神社」としての性格を強めていきます。



戦前期発行の日露戦争を扱った本

日清日露戦争と奈良②

戦勝記念図書館と大和忠勇者列伝



戦死者を祀り、顕彰する動きは県レベルでも行われました。奈良県では、目的の一つとして「三十七八年戦役ニ於ケル戦病死者ノ遺物履歴等ヲ蔵置シテ其勲功ヲ表彰ス」ことをうたった奈良県立戦捷（勝）記念図書館を明治 42（1909）年に開館させます。奈良県初の県立図書館でした。

「戦病死者ノ遺物履歴等」の調査は開館直前から進められ、郡市別の「三十七八年役大和忠勇者列伝」「日露戦役病死者写真帖」が編纂されました。但し、前者が 11 郡市分揃っているのに対し、後者は 3 郡分を欠き残存している分でもごくわずかな戦死者の写真しか収録していないものもあります。これらは、図書館 2 階の記念室に展示されていました。



『日露戦役病死者写真帖 生駒郡編』（請求記号：210.67-12-2）



『三十七八年役大和忠勇者列伝』
(請求記号：281.65-サンシ-1～12)
※まほろばデジタルライブラリーで公開

【参考文献】

- 第 46 回戦争体験文庫資料展示
『戦勝記念図書館の記憶 / 記録 図録 / 史料編・目録編』奈良県立図書館情報館 2017 年



開館当初の奈良県立戦捷記念図書館。建物は大和郡山城址に移築され現存している。『奈良県立戦捷記念図書館一覧 1』掲載の画像を自動着色

日清日露戦争と奈良③

戦利品の下付

ほかに戦争の記念事業としては、学校・神社・寺院への戦利品（敵軍から分捕った兵器類）下付が挙げられます。日清戦争後にも橿原神宮、吉野神宮が戦利品の下付を願い出た記録が見えますが、日露戦争の際には、陸軍省自らが大々的に下付を行っています。

こうした中、忍海村箱吹（現葛城市）の葛木坐火雷（かつらきいますほのいかづち）神社では社司と氏子総代が連名で、神社の由緒と格式を誇りつつ、「大砲 3 門、砲弾 30 個、コサック鎗 30 本、水雷 1 個」の下付を求める文書を陸軍大臣に提出しています。

この要望が通れば、建設中の記念碑と合わせて、図のような形に配する予定だったといえます。しかし、陸軍省は「可成配賦ノ普及ヲ図ルノ趣旨ニ有之」、つまり薄く広く下付する方針をとったため、実際に下付されたのは大砲 1 門と砲弾 2 個にすぎませんでした。

神社の場合は村社、寺院の場合はそれに相当する格式のもの以上と、多くの社寺が下付対象となりました。県が作成した運搬費計算表の欄外には、「配布個所総数」として神社 534、寺院 588、招魂社 1、学校 36、図書館 5 という数字が記されています。

しかし、現存する日露戦争戦利品は多くありません。個々に追跡を行う必要がありますが、太平洋戦下の金属供出や、同終戦後の軍国主義シンボルの撤去といった機会に、失われたものが多かったのではないかと推測できます。但し、葛木坐火雷神社の大砲については現存し、今も境内にそびえたっています。



【参考文献】

- 『明治廿八年 社寺雑件』（請求記号：1-M28-52d）
- 『戦利兵器 配賦二関スル書類』（請求記号：1-M40-39）